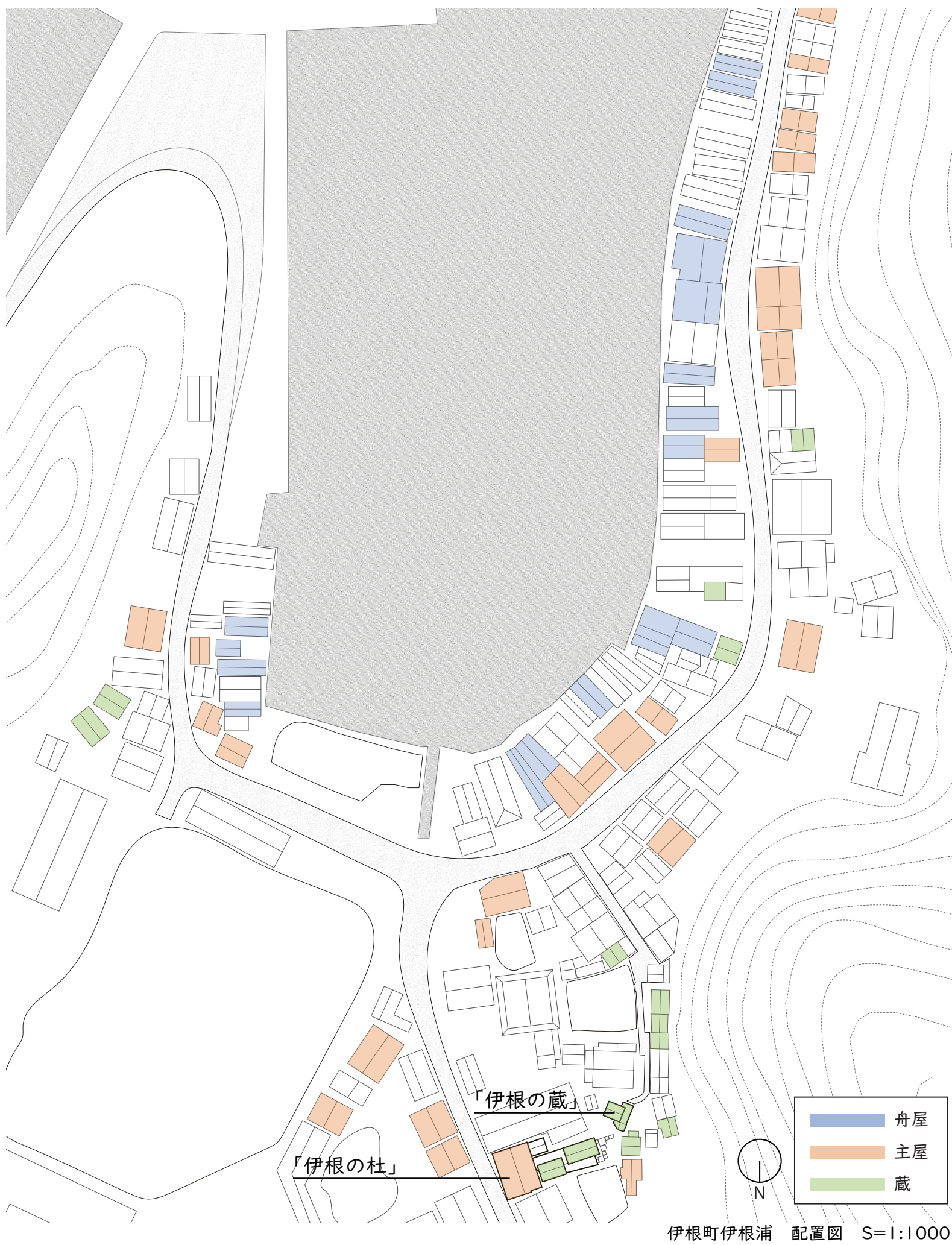


伊根町プロジェクト

— 観光と共存する集落の生活像を再編する実践と提案 —



00. 海側の「伊根の舟屋」で知られる伊根町

京都府伊根町伊根浦。海に迫り出す「伊根の舟屋」の景観で知られるこの町は、重要伝統的建造物群保存地区（以下、重伝建）に指定されて以降、国内外から注目を集める観光地となっている。

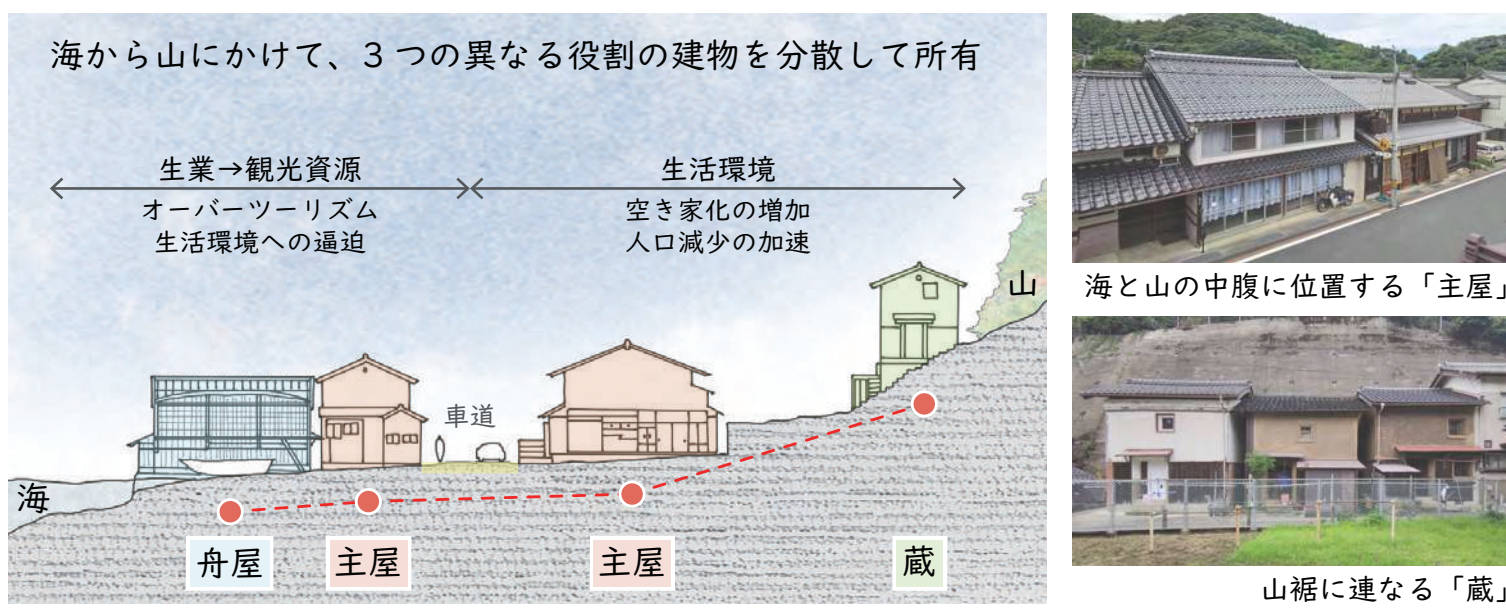


01. 海から山へ、舟屋－主屋－蔵の分散所有の集落構造

本来の伊根浦は、海側の「舟屋」、表通りを挟んだ中腹の生活拠点である「主屋」、山裾の「蔵」という3つ機能を持つ建物を、海から山へと分散して所有する独自の集落構造を有している。

しかし現在、漁業機能の移転により舟屋は本来の生業としての役割を失い、観光利用が集中することでオーバーツーリズムが発生している。一方で、生活の中心である主屋は人口減少・高齢化に伴い空き家化が進行し、蔵も住居そのものの防火・防犯性能の向上により貯蔵としての役割を失い、その多くが放置された状態にある。結果として、海側に観光が偏在し、山側の生活基盤が希薄化するという、集落構造のバランス崩壊が進行している。

実践と提案を横断する形で進めている本プロジェクトは、海側の舟屋のみならず、山側の主屋と蔵を含めた集落全体の生活像を更新しながら持続させていくことを目的としている。





「伊根の杜」主屋外観



本の蔵内観



主屋2階から、山に向かって増築した2棟の蔵を望む



閲覧スペースとなる下屋内観

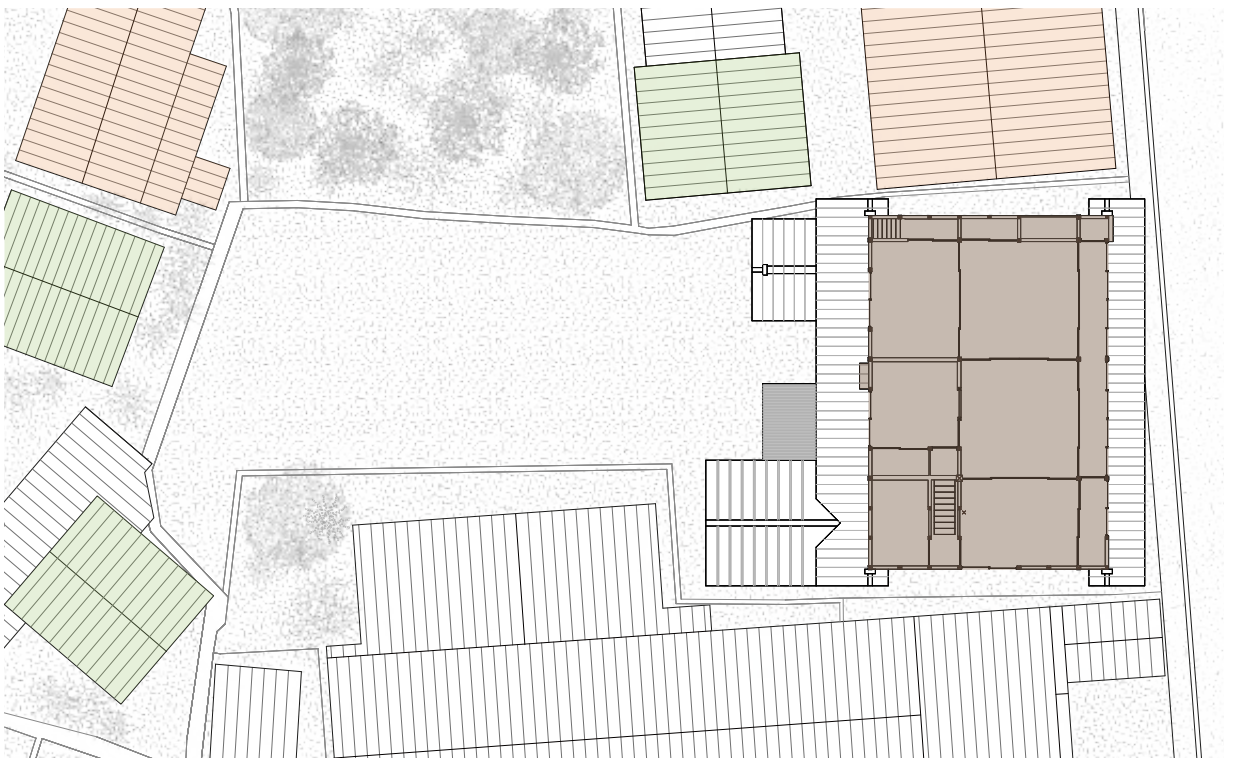


山裾の既存蔵群側から見た本の蔵外観

02. 「伊根の杜」—主屋の再生と蔵群への接続

この課題に対し、山側に位置する重伝建の主屋を改修し、観光機能ではない、地域住民の生活環境を向上させるための文化振興・多世代交流施設「伊根の杜」を整備した。京都工芸繊維大学木下昌大研究室がプロポーザルを担当し、その後木下准教授が主宰するキノアーキテクツにより設計を行っている。

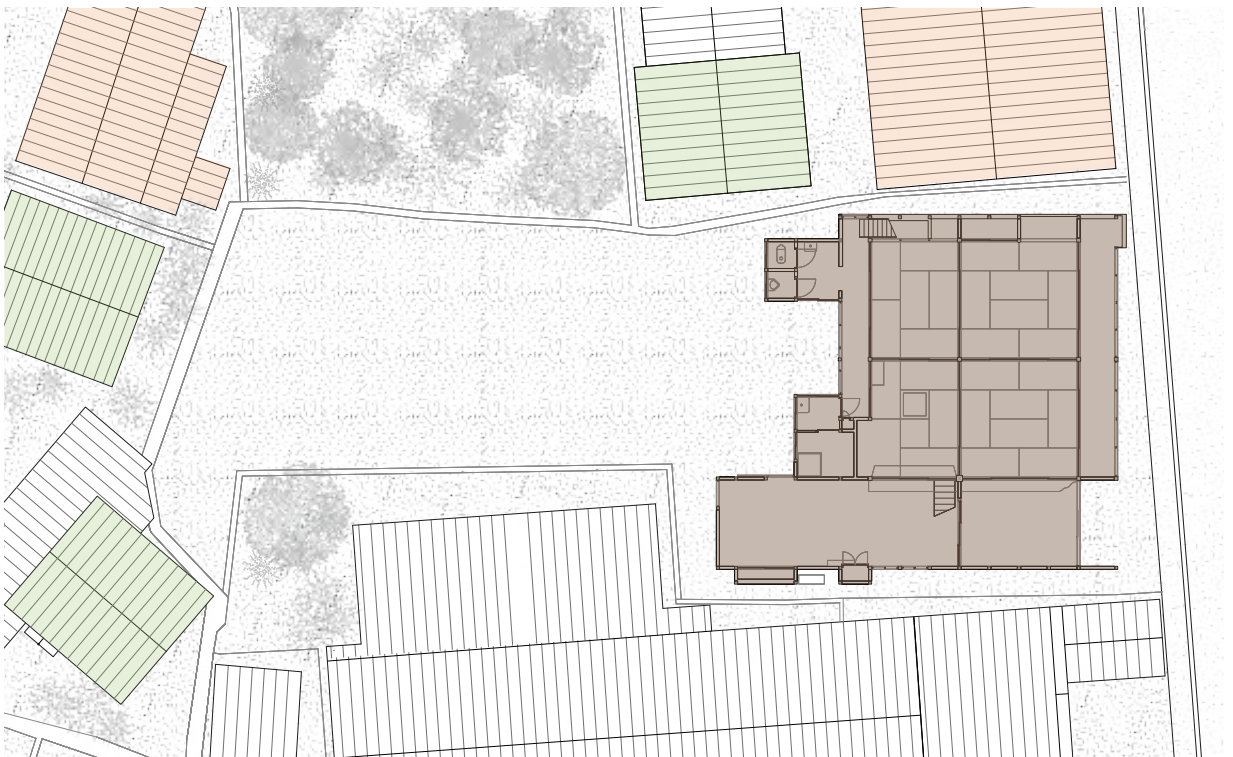
図書館機能を内包する本施設では、背後の蔵群に呼応するように二棟の「本の蔵」を増築し、下屋によって接続した。これにより、伊根固有の空間構成を敷地内に再編し、地域住民、とりわけ子どもたちの文化的な居場所を創出している。



改修前 2F 平面図 S=1:250



改修後 2F 平面図 S=1:200



改修前 1F 平面図 S=1:250



改修後 1F 平面図 S=1:200

03. 山裾の蔵群の再生と里道の再編への展開
- 「伊根の蔵」改修プロジェクト -

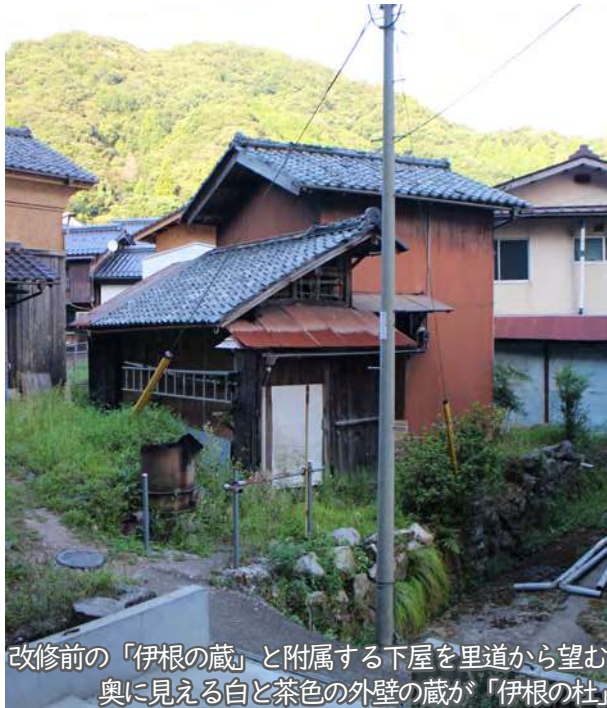


03-1. 下屋の解体と半屋外空間の創出、里道への開放

「伊根の杜」開館後、背後に位置する「伊根の蔵」に対して京都工芸繊維大学木下昌大研究室による自主設計施工による改修プロジェクトを開始した。

まず、蔵に付随する下屋の土壁を解体し、その土を再利用して土間空間を整備することで、下屋を半屋外空間として再生した。これを里道の延長として開放することで、伊根の杜から既存生活動線である里道が下屋を介して接続した。さらに、下屋内にテーブルや椅子を製作・設置し、「伊根の杜」の拡張スペースとして飲食可能な場所を創出した。

これにより、子どもたちが伊根の杜で学び、下屋で食事をとり、里道を通して公園へ向かい遊ぶといった、山側における安全で連続した生活動線を、里道を再生しながら新たに形成している。





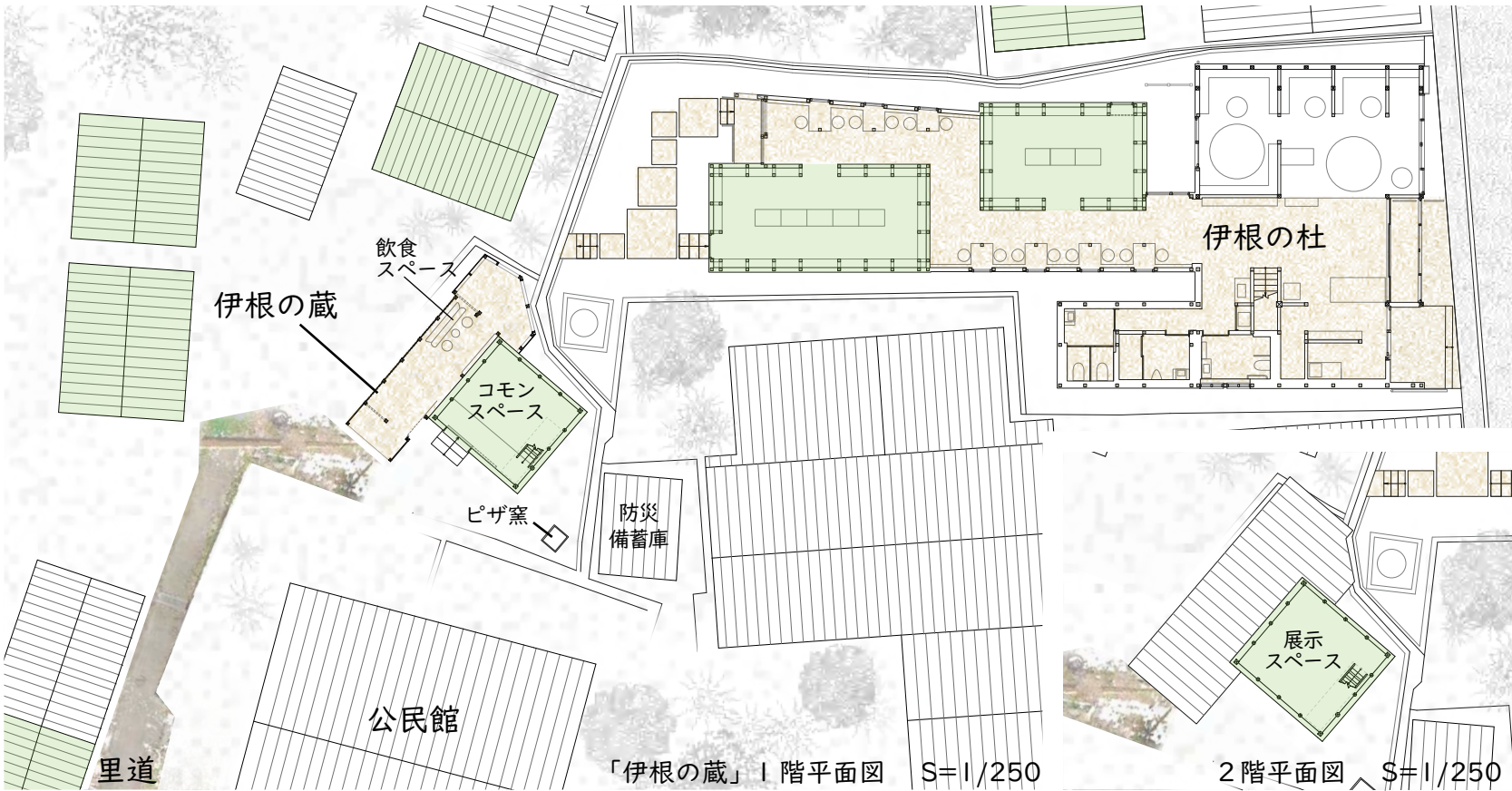
改修した「伊根の蔵」2階

通常時には回収した古材や小道具のストックスペースとして活用しつつ、「伊根の蔵開き（*後述）」の際には、研究室による伊根町での活動・研究成果を展示する空間として地域住民へ開放している。改修前は、床が各所で抜け落ち、歩行も危険な状態であったが、町内で回収した古材を活用して床を貼り換えた。異なる場所から集められた古材それぞれの特性を活かしながら丁寧に接合することで、素材ごとの色合いや歪みが重なり合う空間となっている。また、展示台についても回収した小道具を再利用して製作しており、展示空間そのものが、伊根町における資源循環と生活の痕跡の継承を体現する場となっている。



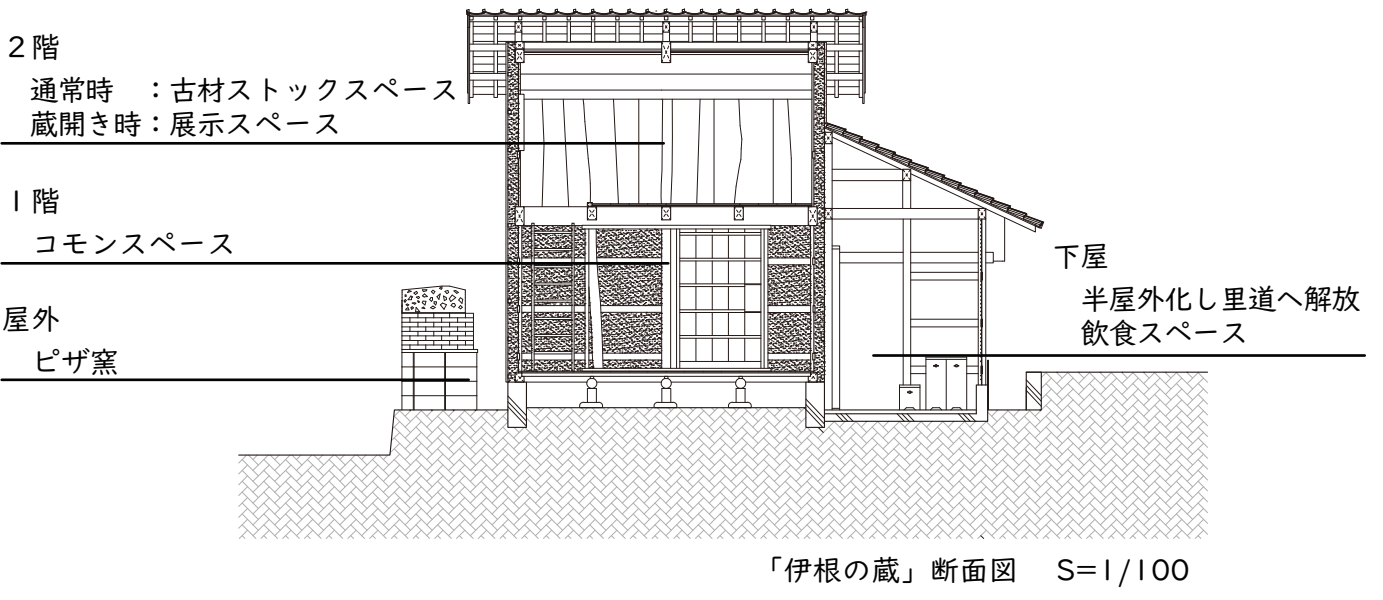
改修した「伊根の蔵」1階

地域住民とともに伊根町の将来について議論するコモンスペースとして整備した。改修前は床の腐朽が進行していたため、その一部を解体することで、コモンスペースとして必要な天井高を確保した。一方で、入口側の床は補強を施したうえで残し、蔵内部に縁側のような空間を創出している。住民はこの縁側に腰掛けながら、伊根町全域を俯瞰する模型やスクリーンを囲み、伊根町の将来像について対話を重ねる。また、縁側に設置した座布団には、かつて漁業で使用されていた釣り糸巻きを再利用するなど、空間を構成する要素そのものに、地域の生業の記憶を継承している。



改修した「伊根の蔵」下屋

蔵に付随する下屋は、里道の延長として常時開放される半屋外空間であり、「伊根の杜」の飲食スペースとしても活用されている。既存の土壁を解体することで、竹小舞から光が漏れる開放的な空間へと再編し、解体した土壁の土を再利用して土間を整備した。これにより、下屋は単なる付属空間ではなく、人々が通り抜け、滞在する里道の一部として機能している。また、内部の什器には町内で回収した古材を再利用している。

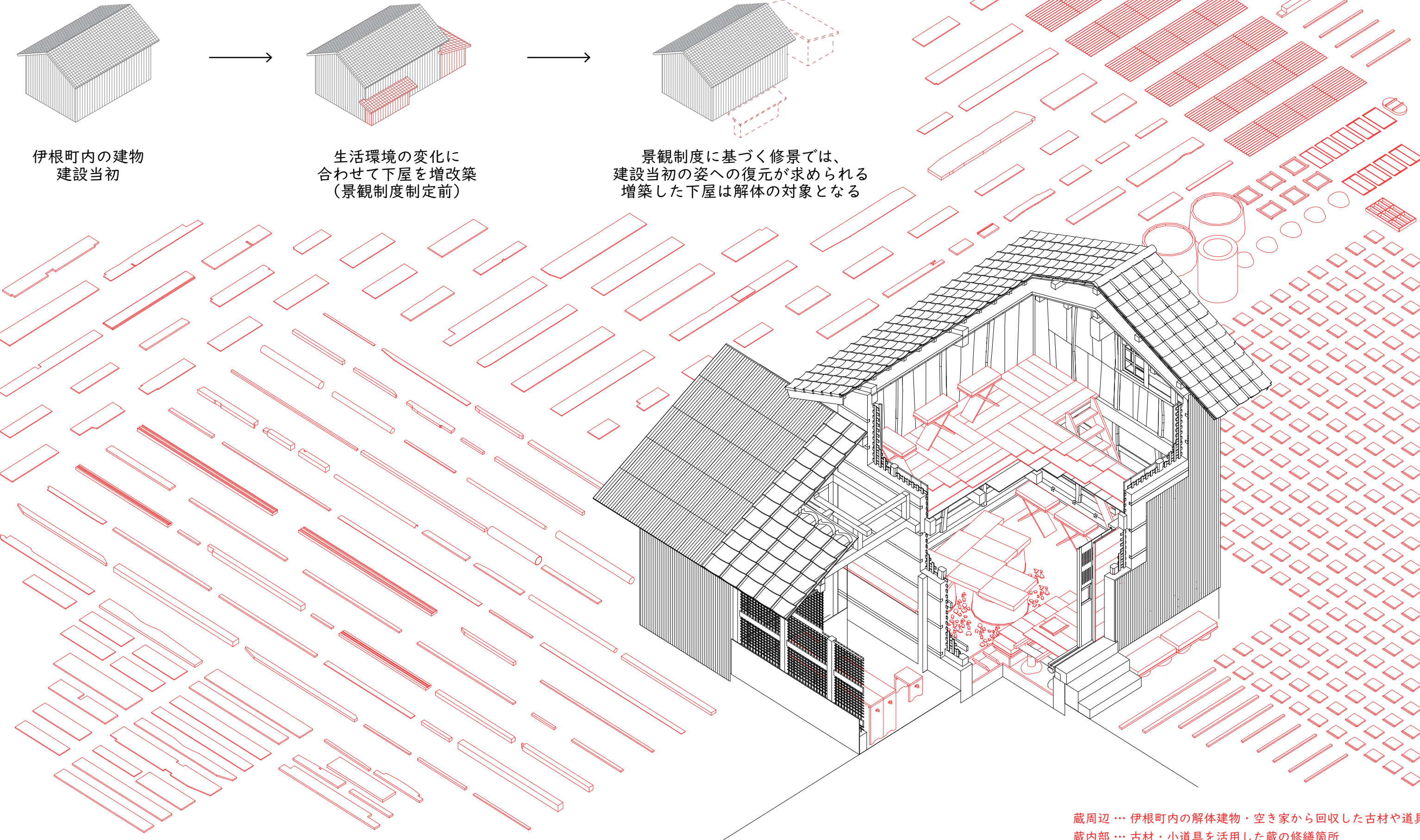


03-2. 伊根町内の解体材を活用した蔵の修繕

蔵本体の改修では、町内で解体される建物から回収した古材や古道具を再利用した。

伊根町は重伝建地区に指定されているため、各所で絶えず「伊根らしい」景観にすべく修景工事が行われている。修景工事は基本的に、建設当初の姿に復元することが求められるため、生活環境の変化に対応する形で後から増築した下屋は解体される運命にある。

研究室ではその過程で生じる解体材を蔵の修繕に再利用した。制度が集落全体の景観を保全する一方で、個々の建物においては解体材を自主施工によって使い直し、そこに刻まれた生活の痕跡を別のかたちで引き継いでいく。単純に制度を批判するのではなく、そうした往復のなかでこそ、「伊根らしさ」は継承されていくのではないかと考えて改修を続けている。



伊根町内の建物
建設当初

生活環境の変化に
合わせて下屋を増改築
(景観制度制定前)

景観制度に基づく修景では、
建設当初の姿への復元が求められる
増築した下屋は解体の対象となる

蔵周辺 … 伊根町内の解体建物・空き家から回収した古材や道具
蔵内部 … 古材・小道具を活用した蔵の修繕箇所



伊根町内の主屋の改修に合わせて解体された下屋



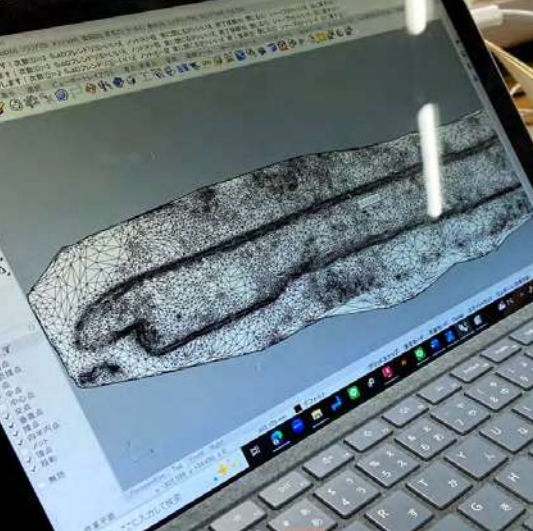
解体建物・空き家から古材を改修



狭い里道を人力で運搬



回収した古材・古道具を整理・ラベリング



3D スキャンでアーカイブ・設計検討に活用



大学での作業、運搬を考慮して半間ごとにユニット化



古材を活用して2階床を貼り換え補強



古材ゆえの特性を活かした仕上がり



1階既存床の一部撤去し、縁側を内部に創出



下屋の土壁の解体



土壁を再利用して土間を整備



古材を活用して飲食用の什器を設置



かつて漁業で使用していた釣糸巻



麻縄を巻き直して縁側の座布団に





04. 「伊根の蔵開き」—対話の場の創出

改修した蔵では、伊根町での私たちの活動内容の展示・報告と、「伊根の蔵」さらには、伊根町全体の将来のあり方を話し合う場として「伊根の蔵開き」を定期的に開催している。

2 階では生成 AI を活用した景観制度における住民自らによる決定プロセスを構築する研究の展示を行い、1 階では床の一部を撤去して縁側状の空間を設け、そこに腰掛けながら住民が模型や映像を囲みながら対話できる場を整備した。下屋の飲食スペースの整備も、この「蔵開き」での住民のからの要望を反映したものである。

05. 将来像共有するためのマスタープラン提案

「伊根の蔵開き」では、伊根町全体の将来像について地域住民との議論を重ねている。そこでは単に意見を募るのではなく、研究室が構想した集落全体に及ぶマスタープランを提示したうえで、集落の将来像を共有しながら対話を行っている。

以下にその概要を示す本提案は、研究室が山裾で進めてきた主屋・蔵群およびそれらに沿う里道の再生を基盤とし、その取り組みを将来的に海側の舟屋群へと展開することで、観光と共存しながら伊根町全体をどのように再編していくかを示すマスタープランである。

本提案は単なる空間改修などのハード提案にとどまらない。人口減少と高齢化によって空き家化が進行する一方、重伝建地区に指定されていることで容易に取り壊すことのできない建物群を活用し、移住から定住、さらには就業までを見据えた運用スキームを構築している。具体的には、舟屋－主屋－蔵という各建物の特性に応じて、観光による短期滞在、お試し移住による中期滞在、長期滞在から定住へと至る段階的な居住・就業のあり方を設定し、多様な人々を受け入れる移住促進システムを集落全域に対して提案している。

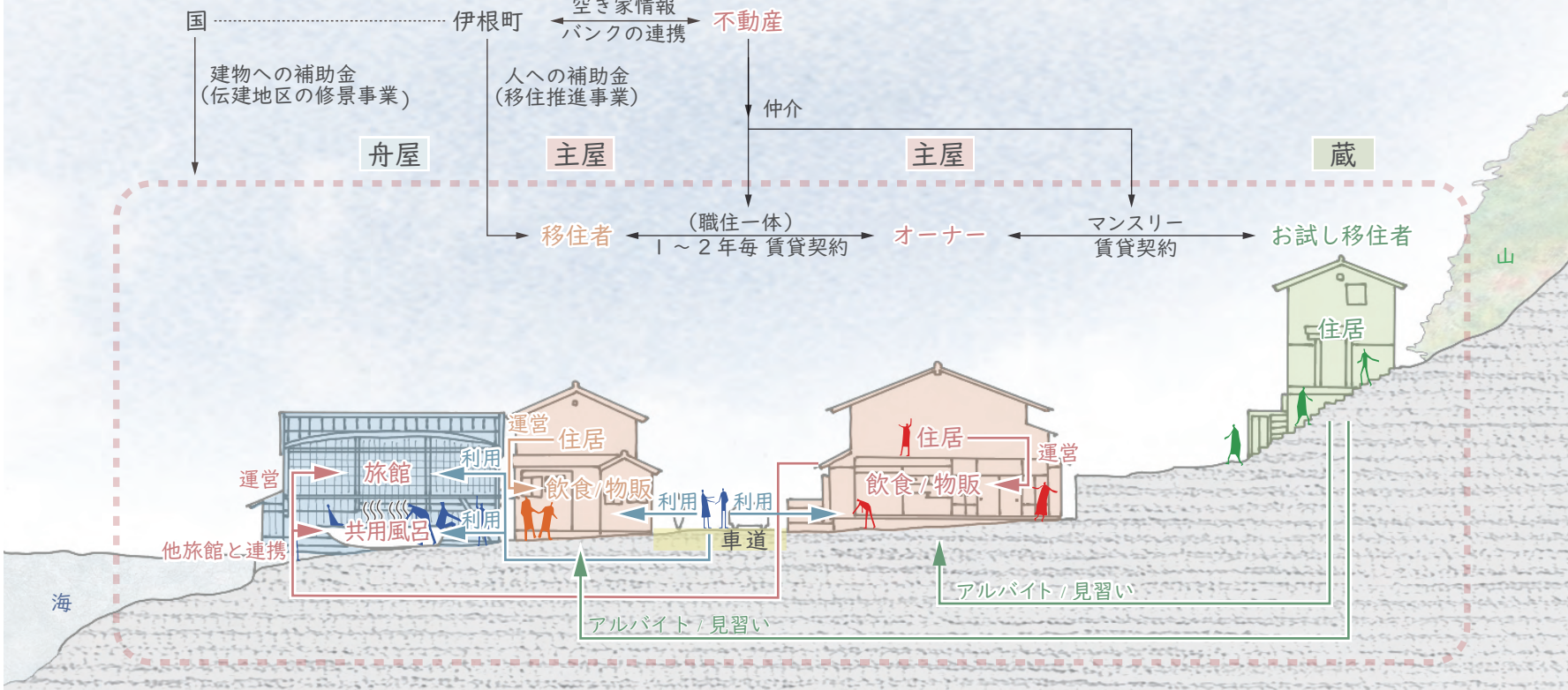
さらに、多様な人々を受け入れることで高密度化する集落に対し、研究室が進めてきた里道の再生を集落全域へと展開することで、新たな動線や余白空間を形成し、人々の距離感を緩やかに調停するバッファとして機能させることを提案している。

実践的な改修・再生活動と、将来に向けた設計提案の両者を横断的に展開し、それらを「蔵開き」を通じて地域へ発信することで、住民一人ひとりが伊根町の将来を自分ごととして捉える契機を生み出している。

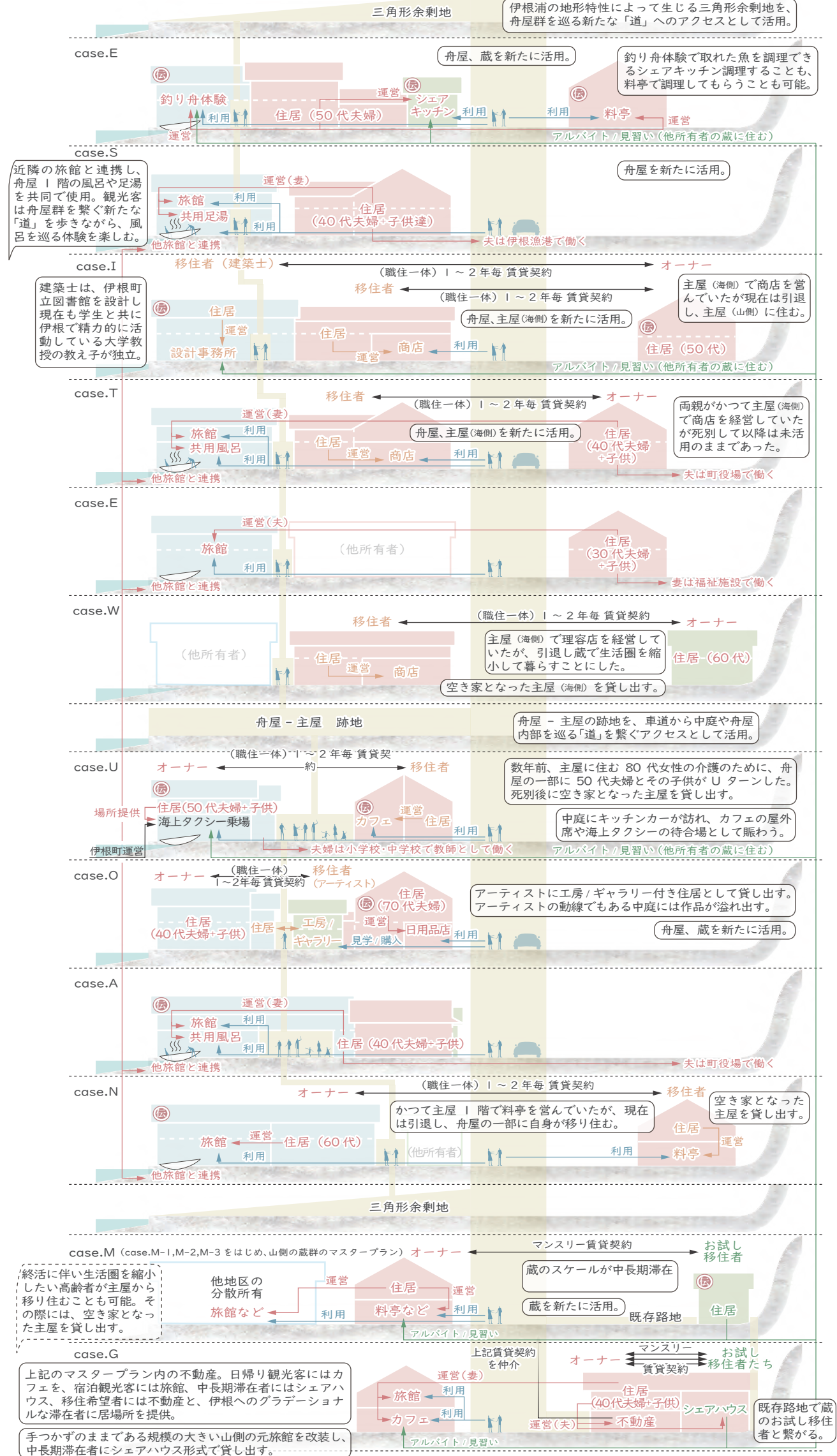
1. 多様な滞在期間を設定した移住プラン



2. マスタープラン

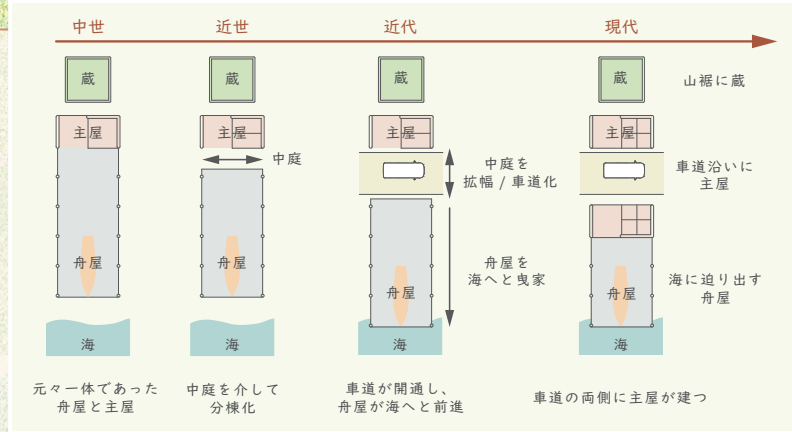


3. マスタープランを基に集落全域でスキーム構成



4. スキーム構成を空間設計として提案

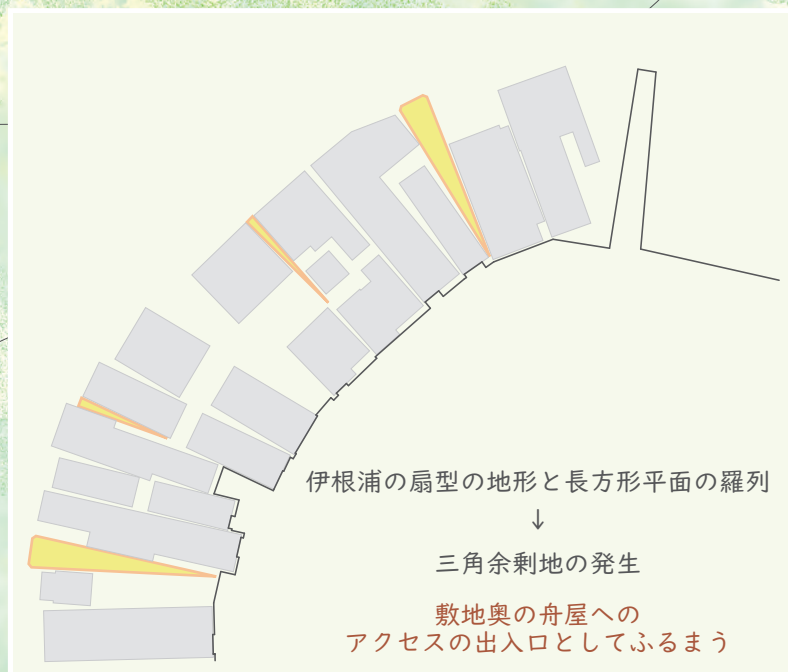
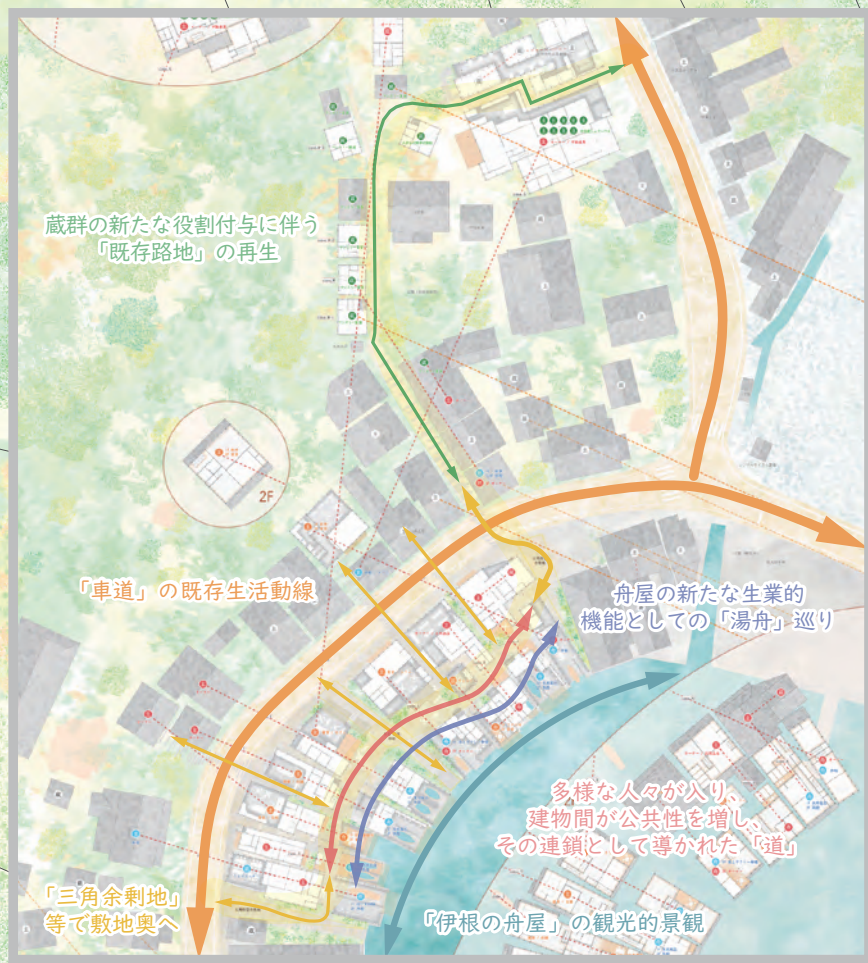
伊根の集落構造の変遷．車道は後から創出された



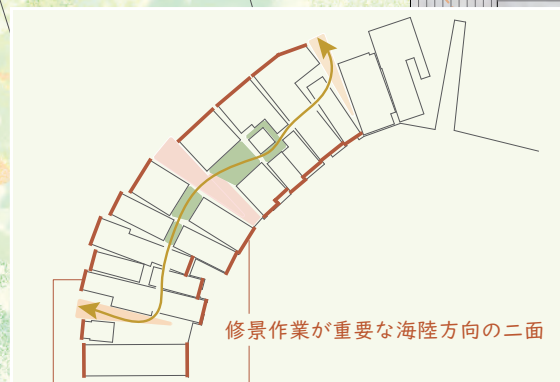
多様な余剰地の集合、側面の操作によって生まれた中庭的な広場



山裾の里道再生を展開し、
集落全域に多様な使い手を想定した道を再生 / 新設



修景に比較的抵触しない側面の操作により、
車道から離れた道を創出



伊根町伊根浦(西平田地区周辺)
集落全体平面図 S=1:150

建物利用者

○ 分數所有（主要提案地区：西平田地区）

○ 分數所有（他地区）

○ 他との所有関係不明／単独所有

建物利用者

● 観光客

● お試し移住者

● 移住者

● 地域住民

○ 主要提案以外の建物／地域住民

建物形態

舟	舟	舟	舟	舟	舟屋
主	主	主	主	主	主屋
蔵	蔵	蔵	蔵	蔵	蔵

